

公開シンポジウム「21世紀の北海道畜産・草地の展望」

日 時：2001年9月3日(月) 13:00～17:30

場 所：北海道大学学術交流会館 大講堂

共催シンポジウム実行委員長：大久保正彦（北海道大学）

座 長：左 久（帯広畜産大学）、鮫島邦彦（酪農学園大学）

講演

- | | | |
|--------------------------|------------------|------|
| 1. はばたく北海道畜産、その現状と未来 | 北海道立畜産試験場場長 | 田村千秋 |
| 2. 畜産の先端技術がひらく新たな展望 | 北海道立畜産試験場受精卵移植科長 | 南橋 昭 |
| 3. 北海道の草地の歴史と持続的発展へのシナリオ | 酪農学園大学酪農学部教授 | 松中照夫 |
| 4. これからの牛乳・乳製品と私達の健康 | 北海道大学大学院農学研究科教授 | 島崎敬一 |

講演に対するコメント

総合討論

シンポジウム「21世紀の北海道畜産・草地の展望」にあたって

北海道は、この100年を通じてわが国有数の農業・畜産地帯へと発展し、新たな世紀においても、日本の食料生産基地としての役割を期待されている。広々とした草地、ゆったりと草をはむ牛、それは北海道をあらわす一つのイメージでもある。

こうした発展のかけには、多くの先人達の、まさに血のにじむような努力があったことを忘れてはならない。未開の大地を切り開き、厳しい寒さと闘い、豊かな耕地・草地をつくりあげ、それを基盤とした畜産の生産システム、加工流通システムを確立したのである。生産者、技術者、行政関係者、研究者などが力をあわせ、畜産王国北海道を実現させたのである。20世紀はそのような世紀であった。

しかし、21世紀をむかえた今、北海道の農業・畜産についても、手放しでは喜べない事態が生じている。食料自給率の低下、農家戸数の減少、環境問題の深刻化などが、北海道の農業・畜産にも

様々な影響を及ぼしてきている。

21世紀に北海道は本当に日本の食料基地たり得るのだろうか。生産者をはじめ、農業・畜産にたずさわる人々に輝かしい未来があるのであるか。本シンポジウムは、新しい世紀のスタートにあたって、北海道の畜産・草地のたどってきた100年を振り返りつつ、新たな100年を展望しようと企画されたものである。北海道畜産学会、北海道草地研究会、北海道家畜管理研究会による初めての共催シンポジウムであり、幅広い各分野の専門家からの話題提供をもとに、生産者、消費者もふくめた実り多い論議が展開されることを期待している。

2001年9月

北海道畜産学会・北海道草地研究会・北海道家畜管理研究会共催シンポジウム 実行委員長

大久保正彦